

本店レク 議事メモ

日時：平成 23 年 4 月 20 日 (水) 11:15~12:05

場所：東京電力本店 1 階 101AB 会議室

先方：記者約 40 名 (カメラ 6 台)

当方：原子力設備管理部 [REDACTED]

広報部 [REDACTED]

配付資料

- ・東北地方太平洋沖地震による影響などについて【4月19日 午前9時現在】
- ・福島第一原子力発電所 プラント関連パラメータ（水位・圧力・温度などのデータ）4月20日 06:00 現在
- ・福島第一原子力発電所モニタリングカーによる計測状況 等
- ・仮払補償金請求書記入見本

質疑：

Q. 2号機立坑の水位が 19 日 11 時から 10mm 低下しているが、移送実績をふまえると妥当だと考えているのか。

A. 集中環境施設への移送の影響と思われるが、直接的な評価はまだ出ていない。

Q. アレバが汚染水処理装置を東電に提供するようだが、どのような内容か。

A. 全体の水処理の中で放射性物質を分離させて濃度を下げるなどをアレバ社にお願いしている。その他の配管や弁については国内の会社にお願いしており、全てがアレバ社の装置ではない。6月に処理が開始できるよう鋭意進めている。

Q. 読売新聞にリストラ案と原発損害賠償機構について記事掲載されているが、事実か。

A. リストラ等に関しては、不動産売却やリストラ等について検討しているが、現時点で決まったものはない。原発損害賠償機構についても具体的に決まってない。

Q. 窒素封入している 1 号機原子炉格納容器の圧力が 165kPa まで下がっているが、酸素と水素を出すという当初の目的は達成できるのか。具体的にどの程度の圧力であれば目標達成していると言えるのか。

A. 今は正圧を保ててるので空気が中に入ってくる状況ではない。現在の封入量で正圧を保てるかどうかを評価しているところ。

Q. 水の移送先である集中環境施設から水漏れは生じていないのか。どのようにして水漏れを防いでいるのか。

A. 現時点で移送した水の流出について情報は入っていない。

移送量に見合った水位上昇がしているかを確認しているほか、周辺の地下水の水位より、集中環境施設内に移送した水の水位を1m程度低く保つことで、建屋に移送した水が地下水側に流出することを防いでいる。

Q. 地下水の水位は変動するかと思うが、水位が低下した場合、建屋に移送した水が流出するのではないか。

A. 過去の状態から地下水の水位が50cm程度増減することを想定して、地下水水位より1m程度低くする予定である。

Q. 4号機タービン建屋の水位が上昇している原因は何か。

A. 少し前から上昇傾向にあり、3号機側から若干流入している可能性もあるかと思うが、詳細は調査中。

Q. 3号機トレーナーの水位が30mm上昇している原因は。

A. 地下水、建屋の水の流入、雨水等の流出が考えられる。建屋側の流入があるのであれば移送を検討したり、防止措置を施すことになると思う。

Q. 4号原子炉建屋地下で5mのたまり水があった件につき、現状どのような状況が把握しているのか。

A. 確認でき次第ご連絡したい。

Q. 飛散防止剤のテスト散布はいつまでやるのか。その評価はどのように行うのか。

A. 来週一段落する予定。評価も含めてとりまとまり次第ご連絡したい。

Q. 2号原子炉建屋を調査したロボットのカメラが壊ったとのことが、その対策はどのようにするのか。

A. 原子炉建屋の換気をすることが必要と考えられるが、そのためにも線量の確認が必要。追加の調査を行い、線量を確認していきたい。なお、ロボットの改良についての検討は現状ではない。

Q. ロボットは原子炉建屋内部のものを何か採取してきたのか。

A. 当初発表した線量等の4点について採取してきた。

Q. ロボットの汚染状況はどうだったのか。

A. 確認する。

Q. 高い線量下におけるロボットへの影響は。

A. カメラは長時間あると劣化すると聞いている。

Q. 外国からの支援一覧を提供してほしい。

A. 確認する。

Q. ロボットによる2号原子炉建屋の調査のうち、線量、ダストの結果はどうだったのか。

A. 線量については4mSv/h。ダストの結果は確認中。時期は未定。

Q. デオライトの調査結果はどうだったのか。

A. 4/19 10時～11時に、4/17に投入した5個のうちの2個を引き上げて線量測定を行い、0.65mSv/h(うちバックグラウンド 0.55mSv/h)だった。この数値の評価については今後行う。

Q. 仮払いの提出先はどこなのか。

A. 各市町村と調整させていただき、現地窓口、市町村、郵送など様々なやり方がある。なお、4/15からカスタマーセンターの電話対応は行っており個別に対応してきたが、現地での説明・資料配付は本日から行うもの。

Q. 作業員の作業管理はついてやっているのか。

A. 線量管理については作業内容・作業時間も含めて記録している。

Q. 作業管理上、偽名で登録しているなどということはないのか。

A. ない。

Q. 工程表について、政府からさらに詳細なものを出せと言われていないのか。

A. ない。

Q. 工程表を公表後、社会からの反響等をふまえて、現状どのように捉えているのか。

A. 皆さまからのご意見を踏まえつつ、今後対応してまいりたい。

以上

情報共有

4/20 PM 会見モード

(4枚)

官邸班、MSA班殿 ← プレス対応TM

会見議事メモ

日時：平成23年4月20日（水）18:30～20:45

場所：東京電力本館3階ABC会議室

先方：記者約80名（カメラ10台）

当方：原子力立地本部

原子力設備管理部

柏崎刈羽原子力発電所第一運転管理部

本店広報部

配布資料：

- ・福島第一原子力発電所の状況
- ・東北地方太平洋沖地震による影響などについて【4月20日 午後4時現在】、
福島第一原子力発電所敷地内における空気中の放射性物質の核種分析の結果
について（第二十六報）
- ・福島第一原子力発電所2号機取水口付近からの放射性物質を含む液体の海へ
の流出について（続報16）
- ・福島第一原子力発電所付近の海水からの放射性物質の検出について（第二十
八報）
- ・福島第一原子力発電所における核種分析結果の厳重注意に対する対応に
ついて（続報1）
- ・当社福島第一原子力発電所におけるモニタリングによる計測状況
- ・福島第二原子力発電所モニタリングによる計測状況
- ・福島第一原子力発電所 プラント関連パラメータ（水位・圧力・温度などのデ
ータ）4月20日13:00現在

冒頭、[]から各資料に関して説明。また、[]から前回の
記者レクの際に未回答であった内容（ロボット、外国からの支援物資等）を回
答。

質疑：

Q. 2号機の汚染水移送に伴い、具体的に前日からの水位変化と移送量につい
て教えて欲しい。

A. 2号機移送量の実績と水位の状況は情報入っておらず、大きな変化無い。
最新値が分かり次第ご連絡する。毎時 $10m^3/h$ で移送しており、立坑、タービ

ン建屋、主プロセス建屋の水位を監視している状況。

Q. 本日公開したロボットの作業映像によって、新たな発見内容はあるのか。

A. 本日提供させていただいたロボットの動画から判明したことは、線量は少し高く、今後、人が原子炉建屋で作業するにはこのままの状況では作業困難であるため、除洗、遮蔽、がれきの処理等が必要と考えている。

また、3号機はがれきが一部落ちているので、爆発の影響がこちらに及んでいると推定している。また、モーターコントロールセンターが相当程度開いていることや二重扉付近に脚立が引っかかっていることなども確認できた。

Q. 一部の報道で「水槽作業に着手」との情報があるが、事実か。

A. 水槽作業については、工程表でお示しした通り、事故の収束に向けて各様容器を水で浸しながら燃料上部に水を漫けることを検討しているが、現時点での水量を増して格納容器を水で浸す作業は着手していない。

現在は1号機の残留熱に相当する注水を行っている。蒸発で余った水が格納容器に溜まる、または蒸発したものが圧力抑制室や格納容器内に溜まりつつあるのではないかと考えている。

Q. 水槽に向けた作業に関して、格納容器の水位を測る手段はあるのか。

A. 格納容器そのものの水位計は付いていないため、圧力容器の温度計等を確認しながら、水位を推定していきたい。

Q. 2号機のトレチの水位が変わっていないことについて、原子力安全・保

安院は「他から流入しているのではないか」と言っているようだがどうか。

A. 原子炉建屋から流入している可能性もあるが、移送量がそれ程多くないため全体の水位として現れにくいものと考えている。

Q. 6号機のRHRS（仮設水中ポンプ）移設作業とそれに伴う影響を詳しく教えて欲しい。

A. 作業開始時刻は本日9時51分で、作業終了時刻午後4時56分。午前10時の炉水温度は26.6°C、使用済燃料プール水温度は32.5°C。その後、最高で炉

水温度は35.9°C、使用済燃料プール水は35°Cまで上昇した。

冷却開始した後の午後5時の温度は、炉水温度は29.6°C、使用済燃料プール温度は35°Cであった。

Q. 核種分析結果の厳重注意に伴う再評価結果の内容を見て、原子炉内の燃料

が溶融していたかどうかの認識についてどのように評価しているのか。

A. 再評価結果を見る限り、検出された核種に予想しないものが見つかったわけではなく、核分裂生成物であるヨウ素、セシウム、バリウム、ランタンが見つかっているため燃料損傷はあるという見解に変更はない。このような核種がタービン建屋地下の溜まり水で見つかっているため、原子炉内の損傷した燃料に触れた水が圧力容器、格納容器、原子炉建屋をそれぞれ経てタービン建屋に流出したものという考えに変更はない。

Q. 炉心溶融はないということか。

A. ペレットが一部溶けて被覆管から剥き出しになっている可能性はあるが、そういった状況については確認できていない。損傷の割合としては1号機は約70%、2号機については約30%、3号機については約25%ということをCAMSとガンマ線線量率から推定している。被覆管が割れているものもあれば、一部ペレットが剥き出しになっている可能性がある。

Q. 3号機の床が漏れている箇所は周辺にどのような配管があるのか。

A. 周辺にどのような配管があるかについては確認されていない。

Q. 図面を見れば分かるのではないか。福島第一原子力発電所では見ているのではないか。

A. 建設当時の設計図は福島第一原子力発電所にはあるかと思うが、配管の場所等を確認する段階にないため、おそらく福島第一原子力発電所においてもまだ見ていないものと思われる。

Q. 「1号機の燃料棒70%損傷」ということを評価して「炉心溶融と捉まえていない」というではないというのはなぜ。

A. 「炉心溶融と捉まえていない」ということではなく、現時点できちんと確認できていないので、被覆管が破れているケースもあるし、温度が高くなつてペレットが溶けているケースもあるが、損傷の度合いとしては約70%とお伝えしたもの。

Q. 損傷度合いを確認できていない炉心溶融と評価しないということか。

A. 70%の燃料が液体のようにどろっと溶けて下に落ちてきたというイメージは我々は正確に持っていない。皆さまの持っているイメージが合わないと言つていることが伝わらないため、損傷の度合いとしては約70%とお伝えしているもの。

Q. 先日示した工程表は、会社として十分な説明責任を果たせていると考えて
いるのか。

A. 燃料、SFプール冷却、拡散防止、モニタリングのために工程表に従って
実施していくもの。

Q. 作業に当たっての線量を測定しているのか。線量マップを公表していただき
たい。

A. 作業環境を適切に管理するために線量マップというものはある。開示につ
いては検討させていただく。

Q. 航空事故等では事故に関するあらゆる情報をできるだけ早期に国際社会に
公表することが通常だと思うが、地震前後のが起こる際のデータはいつ頃開示
するのか。

A. 先般、プラント関連データは取りまとめて公表している。モニタリングデー
タや放射線分析の結果についても公表している。

Q. それ以外に、各国が運用しているプラントの地震対策等に関係があると思
われるデータは現時点では持っていないといふことですか。現時点では持つてい
てデータで公表していないものはないということでよいか。今回の事故が起き
るに際して、どのような状況で起きたかが分かるようなデータを出すことが國
際社会に求められているのではないかと思うが。

A. 発言の趣旨が分かりかねるが、現場ではプラント管理のための各種データ
は採取しているが、原子炉のデータやモニタリング等のデータで必要なものは
公表している。

Q. 賠償関連の財務の問題について。賠償にかかる引当金はいつ決定するのか。
被災者に早急にお金を配分するという観点から教えてほしい。

A. 確認する。

Q. 銀行から融資を受けたものについては賠償に回していくのか。臨時株主総
会を開く予定はあるのか。

A. 確認する。

Q. 作業員について。累積の線量については、作業員本人が知ることができる
のか。

A. 各作業員が線量計を持っており、1人ずつ線量把握を行うことができる。
事故の当初、線量計を代表者が持つ時期も一時あったが、いまは各個人が持つている。

Q. ジビレッジで休む際にも線量計を身につけているのか。

A. ジビレッジに帰ってきた段階で防護服を脱ぎ、除線を行い、線量計は取る。

Q. 1号機の水槽について。今後、新たに配管を設けるのか、従来の配管を使用するのか。

A. 注水の仕方については、1号については給水のラインから、2・3号については高圧素プレイ系から行いたいと考えている。

Q. 3号機の縦坑の水位について。上昇した原因は。また、どのような対策を行なうのか。

A. 可能性としてはT/Bからの漏れ込み、地下水からの流入などが考えられる。現時点では地面まで1mほどあることから、これまでの推移を踏まえまだ時間があると考えている。引き続き、仮設タンク、集中ラド移送も含めて検討していきたい。

Q. 2号汚染水の海への漏れ込みはないとのことだが、詳しく教えてほしい。

A. 含まれるヨウ素131が 10^6 という高濃度の水であり、これが放水されると、付近の海の放射能量がもう少しが上がってくると考えている。なお、14日にシルトフェンスを入れて値が一時的に上がったが、従来は潮の満ち引きによって拡散していたものが一時的に行き場をなくした結果。その後、放射能量が若干低下傾向であり 10^6 レベルの漏れ込みはないのではないかと考えている。

Q. 炉心溶融の件で。炉心溶融の定義、炉心損傷の定義とは。

A. 炉心溶融とは炉心がドロドロに溶けて圧力容器の底に落ちる状態だと思う。現在、炉の状況がよくわからないことから、被覆管が破れているような状況、また燃料が被覆管から漏れ出している状況をひっくるめて炉心損傷と言っている。

Q. 過去に隠蔽やデータ改ざんをしているが、今回も東京電力は隠蔽や改ざんを行っているのではないか。

A. 確かにH10年トラブル隠しやH18年のデータ改ざんがあったが、今回の事故に関して改ざんは行っていない。

Q. 説明責任と情報提供が不十分と考えているが、改善できないのか。

A. 会見を通じて、判明した事実やデータ、写真、映像等を提供させていただいている。不十分ということであれば申し訳ないが、ご希望にできるだけ添いながら改善をしているつもりであり、今後も改善を続けていきたい。

Q. 改善できないのであれば、政治家を交えて会見を行うべきと考えるが。

A. まずは東京電力として改善の努力をしていきたいと考えている。

Q. これまで、ペント、海水注水などを口頭で断片的に聞いてきたが取り纏めて公開してくれないか。

A. 取り纏めて出せるように準備しているところ。

Q. 3/11 19:30までのデータについては計測できていないということか。

A. 停電中についてはデータがない。停電前のデータについては中操で確認がとれておらず、確認作業中。

Q. 炉心溶融は炉心損傷に含まれているという理解でよいか。

A. 私としてはそのように考えている。

Q. 原子炉への注水に給水系配管・消防系配管を使っているが、なぜ建屋が爆発している状況のなか使える状態にあるのか。

A. 1号については途中までは炉心スプレイ系を使って注水していたが、距離の関係から給水ラインに切り替えている。爆発によって損傷しなかった理由については、爆発そのものが原子炉建屋の上部でおこったこと、炉心スプレイ系や給水配管の耐震クラスは中位のクラスであり丈夫な配管であることから爆発に耐えられたと考えている。

Q. 給水系配管等は水を引き出すためには使えないのか。

A. ルートによってはそのような引き回しが可能かと考えている。循環型の冷却を考えるうえでは、いい出入り口があれば消化系の配管などを使うことも考えられる。

Q. ロボットが浴びた線量について。時間はどのくらいの時間浴びたのか。

A. 二重扉を入ってから出てくるまでの時間。1号は16:40～17:30、2号は13:42～14:33。

- Q. パックボットの次の作業は決まっているのか。
- A. 決まっていない。原子炉建屋1F部分のサーベイや、画像による現場の確認などが主な役割になる。
- Q. ウオーリアはどのような作業に就くのか。
- A. 具体的には決まっていない。
- Q. 夏の電力について。5,500万kWの供給を目指しているとのことだったが、目標なのか、達成の目処があるのか。
- A. 5,500万kWは努力目標。確保できているのは5,200万kW。
- Q. 昨日の会見において、炉心溶融の定義について、保安院との見解のすり合わせをした方がよいのではないか。
- A. 保安院と相談させていただく。
- Q. 炉心溶融について。どういう状態でみれば溶けたと言えるのか。
- A. 一例を挙げると、TMIにおいて数年経った後に炉心の映像が公開され判明した。しかしながら、我々は現時点ではまだデータからの推定しかできない。
- Q. 推論をもって仮説を立てていかなければ事実にたどりつかないのでないか。
- A. どのくらいの量が溶融しているかは、なかなか推定の域を出ない。原子力の冷却に向けての作業の中では、炉心溶融の確認は必要性がない。
- Q. 1号の3/11~12の原子炉パラメータについて。公開されているパラメータは2:30までがブランクになっている。一方、12日の午前1時の段階で東京電力が15条通報をしているが、格納容器の圧力が上がったことをどのように把握したのか。
- A. 明日までに確認させていただく。
- Q. ロボットが確認した原子炉建屋において、除線や瓦礫の除去をするなどして、建屋に早く入ることが今後必須と考えているのか。
- A. 原子炉建屋の内部の状況を早くすることは重要と認識。パックボット等を活用して、瓦礫の撤去や線量の低い位置の確認等を行い作業員の活動範囲を決めていくことは可能かと思う。

Q. 5・6号のHWの残量は。

A. 確認する。

Q. 放射能の汚染水を海に放出する際、全体のバランスを考えてのことだが、全体のバランスとはどのようなものか。

A. 1点目としては、地下水の流入に伴い安全上重要な設備が冠水する可能性が高まってきたこと。2点目としては、HWへの移送ラインができていなかつたこと。

Q. 工程表の件。2号機の線量が高く今後作業がどのような形で進むかわからぬという話があるなど、個々の作業を積み上げた工程表ではないと思うのだ。

A. 週単位の作業量、作業工程を積み上げて、おおよその見通しをもとに、工程表を作成したもの。

Q. 今の工程表はとりあえずの目標なのか。

A. こういった目標において、しっかりと努力をし、冷却、放射性物質の閉じこめを行っていくもの。

Q. 工程表どおりに出来なかった場合の責任は。

A. まずは工程表に従って全力を尽くす所存。3ヶ月、6ヶ月のタイミングで突然出来なかつたと公表をさせていただくなど、新しいリスクが確認される度に工程表を見直していくものと認識。

Q. APDの数は。従業員の数は。

A. APDは4月12日現在で1040台。1Fで作業にあたる人数は、社員209名、協力企業36名。

Q. [] の退任についてどのような見解か。

A. 本人から辞意を受け、受理したもの。

以上